

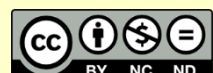
アンデス・アマゾン学会
研究発表要旨集

Proceedings of the Annual Conference of SAAS

Volume 11

2022

アンデス・アマゾン学会
Society for Andean and Amazonian Studies
Japan
[<https://sanams.web.fc2.com>]



アンデス・アマゾン学会研究発表要旨集

第 11 号

2022

【目次】

アンデス・アマゾン学会第 11 回研究大会プログラム		1
第二次世界大戦後の伯刺西爾時報における先住民描写に関する 一考察	長尾直洋	3
亡霊（コンデナード）から見た溺死者（アオガード）	加藤隆浩	5
La Felicidad en Los Andes	Angélica Palomino de Aoki	7
アンデス先住民とヒターノ：その接点の可能性	大平秀一	9
再解釈されるティンク：その成立とフォルクローレ界における 受容から	山本尋	11
マプーチェのマプとは何だったのか？：エコロジーの議論から 考える	工藤由美	13
植民地時代ポトシ銀山とその周辺部社会における市場経済の浸 透と先住民	真鍋周三	15
アンデスの物流を支えたアリエーロの活動と社会的・宗教的意 味づけ	上原なつき	17
ボリビア・ラレカハの農地改革（1）	木村秀雄	19
奥付		21

Proceedings of the Annual Conference of SAAS

Volume 11

2022

【CONTENTS】

The 11th Annual Conference of SAAS Program		1
A Study on the Representation of Indigenous Peoples in the Burajiru Jihō after World War II	Naohiro NAGAO	3
Ahogado: estudios comparativos con condenado	Takahiro KATO	5
La Felicidad en Los Andes	Angélica Palomino de AOKI	7
La posibilidad de contactos entre nativos andinos y “Jitanos” en la época colonial	Shuichi ODAIRA	9
Re-creaciones del tinku: su surgimiento y aceptación en los entornos folklóricos	Hiro YAMAMOTO	11
What was Mapuche's Mapu ?	Yumi KUDO	13
La penetración de la economía del mercado y los indígenas en las minas de plata de Potosí y su contorno en el medio de la época colonial	Shuzo MANABE	15
Actividades comerciales de Arriero en los Andes y sus significados sociales y religiosos	Natsuki UEHARA	17
La reforma agraria en Larecaja, Bolivia (1)	Hideo KIMURA	19
Imprint		21

アンデス・アマゾン学会第 11 回研究大会プログラム The 11th Annual Conference of SAAS Program

期日：2022 年 7 月 9 日（土）、10 日（日）

会場：レクトーレ湯河原（面接と Zoom によるハイフレックス）

1 日目（7 月 9 日[土]）

司会：上原なつき（名桜大学）

13:30-13:35 開会挨拶

第 11 回研究大会実行委員長 大平秀一

13:40-14:10

第二次世界大戦後の伯刺西爾時報における先住民描写に関する一考察

長尾直洋（名桜大学）

14:15-14:45

亡霊（コンデナード）から見た溺死者（アオガード）

加藤隆浩（関西外国語大学）

14:50-15:20

La Felicidad en Los Andes: Un vistazo Antropológico y Social

Angélica Palomino de Aoki (Universidad Doshisha)

15:20-15:35

休憩

15:35-16:05

アンデス先住民とヒターノ：その接点の可能性

大平秀一（東海大学）

16:10-16:40

再解釈されるティンク：その成立とフォルクローレ界における受容から

山本尋（東京大学大学院）

16:45-17:45

総会

2 日目 (7 月 10 日[日])

司会：大貫良史

10:00-10:30

マプーチェのマプとは何だったのか？

工藤由美（国立民族学博物館）

10:35-11:05

植民地時代ポトシ銀山とその周辺部社会における市場経済の浸透と先住民

真鍋周三（兵庫県立大学）

11:05-11:20

休憩

11:20-11:50

アンデスの物流を支えたアリエーロの活動と社会的・宗教的意味づけ

上原なつき（名桜大学）

11:55-12:25

ボリビア・ラレカハの農地改革

木村秀雄（自由学園最高学部）

12:25-12:30

閉会挨拶

アンデス・アマゾン学会会長 真鍋周三

第二次世界大戦後の伯刺西爾時報における先住民描写に関する一考察

長尾直洋 (名桜大学)

キー・ワード： ブラジル日本移民史、勝ち負け抗争、伯刺西爾時報、香山六郎、インカ帝国

A Study on the Representation of Indigenous Peoples in the Burajiru Jihō after World War II NAOHIRO NAGAO (Meio University)

Keywords: Japanese Brazilian History, The Kachigumi / Makegumi Conflict, Burajiru Jihō, Rokuro Koyama, The Inca Empire

本発表は、第二次世界大戦後のブラジル日本移民社会に見られた「日本人と先住民の近縁性」言説に関連して、当時の邦人社会における勝ち組側の先住民描写を分析することで、ブラジル日本移民社会における同言説の全体像の一端を捉えることを目的としている。

近年、ブラジル日本移民史における勝ち負け抗争について、勝ち組側の行動が「ブラジル社会の抑圧に対して日本移民が抵抗した証」〔三田 2018:93〕と評価されるなど、第二次世界大戦での日本敗戦後のブラジル日本移民の反応について新たな視点が提示されている。

同時代のブラジル日本移民による反応の一つとして、細川周平は移民知識人の香山六郎による日本語とブラジル先住民語のツピ語との同祖論に注目した。細川は、香山による日本語とツピ語の近縁性の主張について「ブラジルの正式な国民のメンバーとは見なされていない日本人が、実はヨーロッパ人よりも先に住む部族の兄弟であるという政治的な含み」〔細川 2008:x〕を持つ論であると解釈した。細川は香山論の社会的影響力を否定したが、発表者は香山著書の流布状況、当時の邦字新聞における香山論の発信について確認することで、その社会的影響力への再評価を行った〔長尾 2022〕。

先住民への関心は香山のみが持っていたわけではない。例えば、香山論が発信された同時代のブラジル日本語新聞紙上では、しばしば先住民関連の記事が掲載され、その中には日本人と先住民の近縁性に触れたものも存在している。発表者によるこれまでの調査では、香山論を含めた日本人と先住民の近縁性描写が主に負け組側

言論空間にて見られたことを確認している。本発表では、これまでの調査を踏まえて、香山論に反応を示さなかった勝ち組側言論空間における先住民描写を抽出し、日本人との近縁性を含めて、その属性を分析した。

勝ち組側言論空間として、現時点でまとまった所蔵が確認されている伯刺西爾時報を選択し、1946年12月の再刊から1947年12月までの1年間を本発表での分析対象とした。調査の結果、同期間中に計82の先住民関連記事を抽出することができた。内訳としては、ブラジル国内の先住民関連記事が24、ブラジル国外の先住民関連記事が58である。国外先住民関連記事については、ペルー先住民関連のものが52と大半を占めるため、ペルー以外のブラジル国外、ブラジル国内、ペルーと三種類に分けて、それぞれの先住民描写を分析した後、肯定的、否定的、無属性に分類した。

ペルー以外のブラジル国外の先住民については6記事(9描写)あり、肯定的2、否定的2(5描写)、無属性2となった。肯定的属性としては健康、漁労での優越が示され、否定的属性としては、遅れた文明、野蛮性が示唆されている。

ブラジル国内の先住民については24記事あり、肯定的13、否定的5、無属性6となった。肯定的属性としては、第二世向けの記事においてブラジルの起源、ブラジル独立の協力者などの描写が見られた。また、土地広告や屋号などで先住民イメージが肯定的に用いられている。否定的属性としては、無知、残忍、無進歩、貧弱といった描写がなされた。

ペルー先住民について扱った52記事には、日

本人との近縁性を示す記事が複数見られたため、分類項目として肯定的、否定的、無属性と共に近縁性を加えた。分類の結果、肯定的 28、肯定的・否定的 2、肯定的・近縁性 20、無属性 2 となった。これらの記事群は、戦前日本で出版された著作が分割連載されたものである。その論旨は日本人とインカ帝国の人々との近縁性の主張に置かれていたため、近縁性に関連する記事が多くを占めることになった。肯定的属性としてはインカ帝国の文化水準や道德観等が列挙されている。肯定的・否定的属性として、単体としては優れているが、スペイン人征服者と相対した際に敗者としての描写が見られた。肯定的かつ近縁性を示すものとしては、南米先住民起源に関する諸説など日本人とインカ帝国との相関性を示す当時の学説の援用、言語や事物の類似などが挙げられる。

これらの分析をまとめると、ペルーを除いたブラジル国外の先住民については否定的描写がやや強い傾向にあるが、ブラジル国内の先住民に関しては、特に第二世向けとして、肯定寄りの描写がなされていたといえる。ペルーの先住民（インカ帝国）については、肯定的かつ日本人との近縁性が強く主張されており、当時の読者層へ南米先住民と日本人の近縁性を強く示唆した可能性を指摘できよう。

本発表を通して、第二次世界大戦後の勝ち組側言論空間における先住民描写の属性の一端が明らかとなった。特に、日本人と南米先住民の近縁性が連載記事を通して繰り返し発信されていたことを示した。今後は、これらの先住民描写が持つ社会的意味について考察を進めると共に、分析対象の範囲を拡大することで、ブラジル日本移民社会における日本人と先住民の近縁性言説の全体像を捉えたい。

【主要参照文献】

長尾直洋、2022、「香山六郎による日本語・ツピ語同祖論の社会的影響に関する一考察：ブラジルにおける日本語新聞を中心に」、『名桜大学紀要』、27:29-41。

細川周平、2008、『遠きにありてつくるもの 日

系ブラジル人の思い・ことば・芸能』、みすず書房。

三田千代子、2018、「ブラジル近代史の一頁としての『シンドウレンメイ事件』」、『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』、12:87-100。

亡霊（コンデナード）から見た溺死者（アオガード）

加藤隆浩（関西外国語大学）

キー・ワード：アオガード、溺死者、亡霊、コンデナード、アンデス、海民

Ahogado: estudios comparativos con condenado

TAKAHIRO KATO (Kansai Gaidai University)

Keywords: ahogado, condenado, Andes, pescadores, costeños

1. なぜ亡霊を問題とするか／亡霊を論ずることによって何が分かるか

アンデス世界では様々な超自然的存在が蠢いている。ここで取りあげる亡霊もその範疇の一つである。しかし、亡霊と一口に言ってもそのように呼ばれるものは世界中のどこにでも分布し、その先々で形状も性質、社会的意味や機能も千差万別である。するとすぐに統一的な解釈を求めようとする向きも出てこようが、ここではそうした誘惑には乗らない。ひとまずは古典的な――必ずしも「古い」ということではない――手法に則り細部にこだわってそれを地域単位で検討してみようと思う。

アンデスでは人々の間でしばしば亡霊が話題に上る。実際にそれと遭遇したと言い、時には日常世界では信じがたいような話になることも少なくない。実体験の亡霊であれ亡霊譚であれ亡霊の存在が前提であり、それは部外者にとっては「譚」が付いて単なる「お話」のように受け止められるかもしれないが、当地人たちにとってみれば、それは、信憑性のあやふやな世間話というよりも、社会で共有される実話、真実の出来事ということになる。したがって話の中の出来事、所作も、現実のこと、事実と受け取られ、亡霊譚は「譚」であるにもかかわらず、その中味は社会的存在が引き起こした社会的事実ということになる。

では、それはいったいどのような内容なのか。亡霊はこの世とあの世を行き来する。その往来が亡霊の必要条件と言ってもよい。そうであれば、この超自然的存在を切り口に、現世も来世も射程に入っている。もちろん、その行き来に注目すれば、両者をつなぐ世界をも見ることができる。そ

ればかりか亡霊は、死後普通の人々の行く道を阻まれ、この世に舞戻することを余儀なくされている点に着目すれば、どのような掟の侵犯行為が、亡霊化というサンクションを招くのか、またそれはなぜか、など亡霊化の理由を検討することで、アンデスの人々が究極的に考えるべき社会像の輪郭を垣間見ることができ、彼らの想像力の基をなす心性の一部に触れることになるはずである。

2. 2種類の亡霊

アンデスの亡霊譚を研究者の目に触れやすい形でまとめたのは、ホセ・マリア・アルゲダスで、その「マンタロ谷の民俗」[1953,1978]には20話余りの亡霊譚が記録され、これまで圧倒的影響力を放ってきた。例えば：「くつをほしがる亡霊」は次のように語られる。

ある夜、旅の商人が人けのない山道を歩いていた。すると亡霊が向こうから叫び声をあげてやってきた。旅人は、びくびくしながらも、「お前は誰だ？」と亡霊に尋ねた。すると、亡霊は自分の正体を明かし、自分が亡霊になったのは、銀貨をヒョウタンに入れて埋めたままにしておいたのが原因だと告白した。そして旅人に、もし亡霊の出身地の近くを通ることがあれば、家族に、次のような伝言を頼みたいといった。「自分は、銀貨を地面に埋めて隠した廉で、亡霊になった。もし、その銀貨の入ったヒョウタンを掘り出してくれるなら、私は神に許され天に召されるだろう、と」[アルゲダス 1978:56-58]。

以上は、マンタロ谷の典型的な亡霊譚の例で、ストーリーの展開に「亡霊の告白と懇願」というモチーフが入っているのが特徴的である。そし

て、多少の例外はあるにせよ、それがアンデスの亡霊（譚）の典型と見なされてきた。だから、アンデスのどこでも亡霊と言えば告白懇願型であるという安易な決めつけが一般化してきた [加藤 1981 ; Fourtané 1989 etc.]。

しかし、マンタロ谷以外で採集された亡霊譚を注意深く読み、その出所を個別にあたってみると、アンデスの海岸地方には、告白懇願型とは別の亡霊譚が分布していることが判明する。それがアオガード（溺死者）で、海岸地方を流離う海民が、「海の亡霊」と呼んでいるものである。たとえば、次に提示する話はその典型である。

エル・アオガード

アオガードは亡霊である。ワンチャコとサンティアゴ・デ・カオとの間で商売が行われていた頃の話である。二人の商人がアオガディートと出会ったのである。ある夜明け方、荷を用意して、二人はロバに乗って楽しく話しながら道を急いでいた。すると、突然、ロバが耳をピンと立てた。それは、危険が迫っているという印だった。強く鋭い口笛の音が聞こえたので、二人のうなじの毛も逆立った。それは、アオガディートと出会ったという証拠だった。アオガディートは、海で溺れて死んだ者の亡霊であり、救われるためには、もう一人のキリスト教徒を自分と一緒に連れていかねばならない。口笛の音が近くで聞こえる時には、それは遠くにおり、遠くに聞こえる時には、それは近くににいるということである [2018 年、ワンチャコにて再話]。

3. コンデナードとアオガードの比較

両者には死後の世界への入場を拒絶された者として共通点もあるが、より重要で看過できない相違が2点ある。

本質的な相違 その1)：超自然的存在の正体を暴くか暴かないか

コンデナードでは、生者が「お前は誰だ」と尋ね、コンデナードもそれに答えて身元を明かす。それに対しアオガードは言葉を持たず、コミュ

ニケーションがとれない。分かっているのは、匿名の溺死者ということだけである。

本質的な相違 その2)：死者が通常進む死出の道から外れ、亡霊化する理由

山間地では主に財に関わる犯罪、反社会的経済行為・欲望が亡霊化の原因となり、その反社会的行為が正常化してはじめて救済の道が開かれる。他方、海岸部では溺死が亡霊化の原因となる。それは他者を困らせるような行為ではないが、溺死者は亡霊化する。救済されるには、次の犠牲者（アオガード）を用意しなければならない。つまりアオガードはアオガードを再生産しなければならないのである。

4. このような差異が出てくる背景は何か

それにはまず、亡霊とアオガードとの社会・宗教的意味の相違があるように思える。コンデナードの社会的意味は、亡霊になっている個人の特定し、財の独占の開放を徹底しようというものである。それに対しアオガードは人々を恐怖せしめる亡霊ではあるが、そこにはバルボアのクロニカの記述、海岸地域から出土する土器の図像、また現代のいくつかのモノグラフに記されているような海への人身供儀と関係があるように見える。

【主要参考文献】

Arguedas, José María, 1953, Folklore del Valle del Mantaro, *Folklore Americano*, Año1, No.1, pp.101-293. (アルゲダス・ホセ・マリア [三原幸久・在田佳子訳]、1978、『インカの民話』、新世界社)

Fourtané Nicole, 1989, “El Condenado”: Una expresión del sincretismo hispano-quechua, Universidad Nacional Mayor de San Marcos Facultad de Ciencias Sociales.

加藤隆浩、1981、「ペルーにおける亡霊説話」、『イペロアメリカ研究』、III-2、pp.29-42。

La felicidad en los Andes

Angélica Palomino Rivas Aoki (Doshisha University)

Palabras claves: sonrisa, vivir bien, naturaleza

The concept of happiness in the Andes

Keywords: smile, living well, nature

1. Introducción

Me gustaría empezar por el significado de la palabra “felicidad”. Literalmente, expresa el buen estado de ánimo de los seres vivientes, estado de satisfacción, de bienestar físico y anímico.

Hace como 30 años, tuve la oportunidad de trabajar durante diez meses como voluntaria en el colegio de la Parroquia Franciscana, ayudando en la educación de los niños quechuahablantes en la provincia Franz Tamayo cuya capital es Apolo donde yo estaba, La Paz en Bolivia. La provincia está a quinientos kilómetros de la ciudad de La Paz.

Lo que quiero decir es que mientras en la ciudad de La Paz siempre había problemas políticos, protestas, inseguridad como siempre pasa en las ciudades, en los pueblos como Apolo y sus tantas comunidades (Aten, Altuyoq, Moqoyoq, etc.) se sentía paz y tranquilidad aunque la gente no tenía riqueza económica, tenía arroz para su consumo, yuca, plátanos, criaban gallinas y cerdos para su consumo. La iglesia católica formaba un papel importante, es que, como hay tantas comunidades y los sacerdotes no podían estar presente en cada población, los catequistas preparados para esta labor religiosa jugaban un papel importante, ellos siempre abrían las iglesias cada domingo donde la gente acudía no sólo a rezar y cantar canciones religiosas, sino era un lugar de encuentro para fortalecer la buena convivencia y tertulia feliz.

2. La gente de los Andes Peruanos

Según mi experiencia hay por lo menos dos tipos de andinos. Por un lado está la gente que siempre ha vivido en el campo dedicándose a la agricultura y a la

crianza de ganados y aves de corral, todo para su consumo. Ellos casi no saben lo que pasa en las ciudades ni les importa la política porque al fin y al cabo no podrían hacer nada para cambiar o mejorar la situación política y económica del país. Pero sí les importa la vida feliz, es frecuente escuchar frases como “barriga llena corazón contento”. Y como se alimentan bien y labran la tierra, muy poco se enferman, apenas un resfrío. Por eso casi no van a los hospitales aunque ahora casi en todas las poblaciones hay postas médicas donde algunas mujeres jóvenes dan a luz. Por supuesto viven felices, pero, al mismo tiempo son fáciles de ser engañados por los foráneos.

Por otro lado está la gente que desea abrir un negocio pequeño y poco a poco se hace una empresa de la familia y puede dar empleo. Estas personas sí viven preocupados por la situación política y económica del país, por ello su felicidad es frágil al exponerse a la vida urbana.

3. El Campo y la ciudad unidos

Quiero resaltar que las festividades desde épocas ancestrales han servido para alegrar y dar ese alimento espiritual que el hombre necesita, antropológicamente hablando.

Como todos saben, Latinoamérica es tierra de fiestas de toda índole, las festividades nos hacen olvidar los problemas nacionales o locales, sirven para darnos energía, calidez y optimismo tanto a la gente del campo como a la gente de la ciudad.

Por ejemplo, en las festividades de las cruces puestas en las cimas de los cerros, los karguyoq de cada cruz (sea un campesino o un ciudadano) no escatima esfuerzos en organizar y hacerse cargo de la

festividad encomendada que para él es un honor ya que podrán visitarlo mucha gente y ayudarlo y al mismo tiempo le satisface porque con el sistema del ayni que aún pervive, no tendrá problemas económicos, más bien será todo bendecido y sentirá esa satisfacción anímica por cumplir dos cosas importantes. Uno, agradecer a los dioses o Apus de los cerros quienes siempre los están protegiendo. Dos, facilitar la diversión, la alegría a toda la gente que viene a la fiesta, comen, beben, bailan, charlan, se encuentran con amigos después de muchos años, etc. Qué más se puede necesitar para sentirse feliz, me pregunto.

4. Resumen

Tal como menciona el periodista Gonzalo Robledo en su libro, estar muy cerca de familiares y amigos en un ambiente rural contribuye a un apoyo psicológico y hace que la vida citadina sea más llevadera. “Otra razón es que, ante la imposibilidad de cambiar las cosas, los latinos se resignan a lo que les toca.”

En mi opinión, la gente de los andes resume la felicidad a su hogar con quienes vive en un ambiente de armonía, y tiene a los vecinos o amigos cuyo apoyo recíproco no tiene precio y es muy importante. Siempre sonrío, pero es desconfiado con extraños.

La sonrisa la llevan desde que nacen, siendo su vida un mundo pequeño no necesitan de cosas materiales para sentir felicidad. Pasa lo contrario cuando se van a las ciudades, lo material es primordial para sentirse bien.

Aunque no he dado números ni porcentajes precisos de habitantes andinos. Se calcula que en América Latina hay entre treinta y cuarenta millones de indígenas, de los cuales la población mayoritaria de habla quechua o aimara se encuentra en Perú, Bolivia y Ecuador.

En Centroamérica Guatemala y México son los países con mayor población indígena.

La felicidad de los indígenas en cualquier país depende de la calidad de vida que llevan, me refiero a

la calidad de su agricultura a la que se dedican mayoritariamente. Su carácter personal siempre es alegre y orgulloso de su origen.

Recuerdo que un grupo de representantes de la población Ashaninka en Perú, se reunieron con un representante del gobierno peruano, primero le obsequiaron un atuendo de su propia cultura. El representante del gobierno se puso el atuendo y acto seguido empezó a saludar a los alcaldes provinciales y distritales sin tomar importancia a los que le pusieron el atuendo. El grupo de personas Ashaninkas se fueron, se retiraron del lugar porque según ellos no fueron respetados ni siquiera tomados en cuenta, esto ocurrió hace dos o tres meses atrás (abril 2022). Entendí el orgullo que uno siente por sus orígenes.

【Referencia principal】

Robledo, Gonzalo, 2016, *Apuntes e Imágenes de América Latina*, Instituto de Estudios Latinoamericanos, Universidad Rikkyo, Tokyo.

アンデス先住民と「ヒターノ」：その接点の可能性

大平秀一（東海大学）

キー・ワード：アンデス先住民、ロマ人（「ジプシー」）、歴史文書、祭祀、楽器

La posibilidad de contactos entre nativos andinos y “gitanos” en la época colonial

SHUICHI ODAIRA (Tokai University)

Keywords: Nativos andinos, Romani (“Gipsy”), Documentos históricos, Ritual, Instrumentos musicales

1532 年、フランシスコ・ピサロ率いる「征服者」の上陸を経て、アンデス地域はスペインの支配下におかれる。以後、スペインからもたらされた新たな文化が、先住民社会に浸透していく。羊・山羊・牛・馬・ロバ・ラバ・豚・鶏などの家畜飼養、衣服や帽子、闘牛等の祭祀、ヴァイオリン、アルパ、チャランゴなどの弦楽器そしてワクラ・プク（角笛）やチリサヤ等の気鳴楽器等は、その一例である。これらは、強要されたキリスト教とは異なり、先住民社会の内奥にまで柔らかに溶け込んでいるように思われる。浸透・混淆の歴史には多大な関心が寄せられてよいが、無文字社会が故に、その考察は困難を極める。

こうした中、ペルー中央高地における報告者の民族誌的調査を通して、スペインの周縁社会との接点を示唆する情報・伝承が得られている。歴史文書における検証の可能性を探るべく、試みとして、16～17 世紀を対象として、アンデス地域におけるロマ人（「ヒターノ」）の存在をめぐる文書調査を実施した。本報告では、ロマ人の新世界への渡航と関わる既存の資料・研究を確認した上で、調査で得られた未公刊文書の一つを提示し、今後の展望を示した。なお文書調査には、コルドバ大学大学院生のマルコス・ラブラーダ（Marcos Labrada）氏の協力を得た。

「ヒターノ（gitano）」とは、「ジプシー」に相当するスペイン語で、ロマ人の他称である。「小エジプト（Pequeña Egipto）」に出自をもつという彼ら自身の言より、エジプト人を意味する「エヒプシアーノ（egipciano）」から転じた語とされる。スペインにロマ人が現れるのは、1420 年代のことである。これまで、ヤコブ信仰をもつハンガリーの王室とカスティーリャおよびアラゴンの王

室間で婚姻関係が結ばれることを機に、騎士たちの往来・レコンキスタへの参加、そしてヤコブ信仰の聖地コンポステーラへの巡礼が隆盛をみることなどに乗じて、ハンガリーからピレネー経由で移動してきたと考えられている。彼らは、トルコ人が背教を強いたヨーロッパ南東部から来たため、聖地から聖地への放浪・懺悔をローマ教皇に課されたとし、それを非定住の理由としていた。教皇、ボヘミア王、ハンガリー王、その他諸侯の許可証を携行し、当初、カスティーリャ国王は地方の領主からの妨害回避のために、やはり許可証で保護していた。1470 年、アンダルシアのアンドゥハルに約 50 人の集団が到着した際にも、エンリケ 4 世の指示に従って領主は彼らを受け入れている [Szászdi 2009:166, 168-171, 190-191]。しかしながら、過剰な施しの要求や窃盗・詐欺等の問題が生じ、1499 年に最初の追放勅令（Prgamática）が出される。以後ロマ人の行動を抑制する国外退去・処刑等を伴う法・規制が再三にわたって敷かれ、非人道的な扱いを受けることになる。必然的に、監視の目の少ない地域に逃れる必要性も生じていく。

1497 年 6 月 22 日、コロンの第 3 回航海により、ロマ人が新世界に渡っている。これは新世界の植民事業の一環で、減刑と引き換えに囚人が植民されたものである。1498 年 5 月 30 日にも、4 名のロマ人が渡航している。しかし、こうした政策はすぐに見直され、国王またはセヴィーリャの通商院（Casa de Contratación）の許可なき渡航は禁止される。そのリストには、ユダヤ人、コンベルソ、モーロ、新教徒、異端審問の有罪者らに加え、王室によって犯罪者と見なされたヒターノも認められる。とはいえ、1568 年には許可

なく渡航しているヒターノの報告が求められており、1570年にはフェリペ2世が再度新世界への渡航禁止を命じている。1581年2月11日には、やはり同国王が、「(ヒターノの一部が新世界に渡っており)彼らは自分たちの服装、言語を用い、人間関係、乱れた生活をインディオたちの間で維持し....容易にインディオを惑わせる」と、先住民への悪影響を懸念して、「ヒターノ・怠惰な放浪者」の確認を副王らに命じ、スペインに戻すよう指示している。

調査を通して確認された文書は、セヴィーリャのインディアス文書館所蔵のものである(QUITO, 8, R. 21, N. 56)。この文書は、1587年2月25日にエクアドルのキトにおいて、オイドール(聴訴官)のフランシスコ・デ・アヌンシアバイ(Francisco de Anunciabay)がスペイン国王に向けて認めた書簡で、計6枚の紙葉(folio)からなる。この書簡には、エクアドルの経済問題等が報告されており、例えば南部に鉱山が豊富にあるものの、インカによってカニヤリ人が追放されたために労働者・先住民が欠如しており、北・中央高地の先住民あるいは黒人奴隷の移植が進言されている。そして、「ヒターノに関しましては、2組の夫婦で6人あるいは8人がここに到着しております」と述べられており、その許可を出したアウディエンシアの長を批判している。その上で、エクアドル南海岸のグァヤキルや現在のコロンビアから帰還させたとある。また、ガレー船奴隷(漕刑囚)と疑われる男たちもエクアドルに来ており、コロンビアに戻したとし、「これらや他のならず者たちがいなくなり、出発した場所から、裁判の証拠を残さずにあちこち通っているのを止めさせ、解決するようにしております。と申しますのは、極めて多くの犯罪行為があり、逃亡されては目をくらまされ、その広さがゆえに探し出すのに骨が折れるからです」とある。

上述した1581年の国王からの指示に応じたものと考えられるこの文書は、少なくとも1587年の段階で、アンデス地域におけるロマ人の存在を示す資料の一つとなる。「証拠を残さずにあちこち通っている」などといった記述より、捕らえられた2組のロマ人の夫婦・家族は、氷山の一角にすぎな

いと容易に推測される。1595年には、怠惰な放浪者で反抗的な者を見つけた場合、追放してチリあるいはフィリピンその他の地域に送るよう、フェリペ2世が副王らに命じている。

スペインにおいて、ロマ人の移住は1783年に合法化される。ペルーのリマでは、1887年には初めてロマ人の到来が怪しげに報じられるようになる。しかしそれは、都市部の理解にすぎず、実際には16世紀の段階でアンデスに辿り着いている。

Martínez [2010:71]も指摘しているように、ロマ人の新世界への渡航・移住に関する研究は進んでいない。アンデス地域の植民地時代における先住民社会とスペインの関係性は、支配体制・法・キリスト教との関係をめぐる一定の秩序の中で考察されてきた。しかしながら、資料の問題こそあれ、イベリア半島からもたらされた多様な文化の浸透の一部については、それらの秩序を超えた多様な社会との接点の可能性も探られてよい。ロマ人は、大道芸・楽器演奏、鍛冶(冶金)、家畜の売買・毛刈、占い等と密接に結びついていた。キリスト教の論理の外側において、ロマ人とアンデス先住民の自然・宇宙の認知・文化には、相互に親近性が感じ取られてもよい。強要されたものではなく、こうした柔らかな接点こそが、アンデス先住民の内奥に染入る混淆の契機になっている可能性がある。ペルー中央高地の祭祀の中には、ロマ人の慣習と酷似した要素が一部みとれる。かつてスペインでは、カタツムリ等の野生食材を売り歩く人々が「チャランゲーロ(charanguero)」と称され、多くはロマ人だった。現在では、それがアンデスを代表する楽器・チャランゴの奏者という意味と化している。

今後、さらなる文書調査ならびに民族誌的調査等を進めていく必要がある。

【主要参考文献】

- Szászdi, István, 2009, Los gitanos en la España del siglo XV y su vinculación a Hungría. *Estudios de Historia de España*, Vol. XI, pp.165-196.
- Martínez, Manuel M., 2010, Los gitanos y la prohibición de pasar a las Indias Españolas. *Revista de La CECEL*, vol.10, pp.71-90.

再解釈されるティンク：その成立とフォルクローレ界での受容から

山本 尋（東京大学大学院）

キー・ワード： ティンク、再解釈、「新しい歌」運動、フォルクローレ

Re-creaciones del tinku: su surgimiento y aceptación en los entornos folklóricos

HIRO YAMAMOTO (Doctorado en la Universidad de Tokio)

Keywords: tinku, re-creación, Nueva Canción, folklore

発表概要

本発表では、ボリビアをはじめとする国々におけるフォルクローレ音楽の楽曲や舞踊の演目として知られるティンク (tinku) の成立と普及について、現時点で手に届く資料や先行研究をもとに通時的に振り返る。ティンクとは本来、ボリビア・ポトシ地方を中心に見られる豊穡祈願の祭礼であるが、ここ約 50 年の間に、さまざまな他者の創作的意図のもとに再解釈を受けてきた。本発表ではティンクがとある「楽曲」から「リズム形式」となり、「民俗舞踊」となるまでの変遷を明らかにしながら、これら「祭礼でないティンク」の登場がいかなる状況に端を発し、何を喚起するのかをひもといていく。

本発表はフォークロアに対する構築主義的な批評の一端をなすが、ここでのフォークロアは民衆の土着的な生活慣習そのものを指さず、それらを社会的、文化的な他者が何らかの目的で表象した所産を指す。職業音楽家によるフォルクローレ音楽の LP 録音や、ボリビアで見られる創作色の濃い民俗舞踊はその典型といえる。

1. 「新しい歌」運動の中のティンク

「ティンク」はまず、フォルクローレ音楽における楽曲として音楽シーンに取り込まれる。この過程を担ったのが、チリ出身の歌手ビクトル・ハラ (Victor Jara) および、同氏と交流のあったチリの音楽グループ、インティ・イリマニ (Inti Illimani) であり、それぞれ 1970 年と 1973 年に、アップテンポのリズムを持つ「エル・ティンク (El Tinku)」ないし「ティンク」という同一の楽曲を各々の LP に収録している。いずれの音楽家も、ラテンアメリカ各国で軍事政権が台頭する

1960 年代から 1980 年代にかけて広く興隆した社会派の音楽的潮流である「新しい歌」(Nueva Canción) 運動における草分け的な立ち位置にある。

ボリビアにおける同運動の代表的担い手には歌手ルイス・リコ (Luis Rico) がいるが、同氏はティンクを曲名ではなくリズム形式とした上で、「旱魃の唄」(Coplas de la Sequía) と題される新たな楽曲を 1982 年に作曲した。同年から翌年にかけてアンデス地域で実際に起こった旱魃を取り上げたナンバーである。荒廃した耕作地を後にして都市に流れ着き、やむなくコカイン製造労働に手を染めたポトシ地方出身の農民からリコが聞き取った顛末がそのまま歌詞となっている [リコ氏 2022 年 5 月 14 日付]。この曲は 1985 年に LP リリースされた。

「新しい歌」運動の中で再解釈されたティンクの背後には、創作者と現地の人々との直接的な交流がある。この点は、ハラたちによる先述の楽曲「ティンク」においても例外ではない。Torres [1996:47] によれば、この楽曲は、当時チリに足を運んでいたボリビア人の行商人を通じて彼らが学んだ土着的な歌がもとになっているという [Torres 1996:47]。

附言すれば、「ティンク」と称される楽曲ないしリズムが収録されたボリビアで初めての LP はリコのものではない。管見では、音楽グループ、ロス・タキパヤス (Los Taquipayas) による 1976 年の作品がそれである。「新しい歌」運動と同グループとの結びつきは必ずしも明らかでないものの、収録されているティンク曲はハラらと全く同じものである。この一致が示すのは、後にボリビアにおけるフォルクローレの代表的なリズム

形式として数多の楽曲や舞踏の演目を受け入れるかの「ティンク」が、チリからの逆輸入に始まって成立した可能性である。

2. ボリビアの国民的舞踏として

1980年代初め頃、「ティンク」の名を冠する民俗舞踏がボリビアで創作され、1990年代から都市部において人気が膨らむ。Sigl[2012:294-297]によれば、この踊りの幅広い受容を促したのが舞踏グループ、ウístウス (Los Tinkus Wist'us) の登場である。一方でその構成員は農村出身者と日頃の交流を欠く非先住民のエリート層に占められ、同研究者はこれをティンクの「白色化」と喝破する [Sigl 2012:294-297]。

発表者が同グループの創始メンバーC氏に行ったインタビューでも、「白人の容貌を備えた大学生という自分たちが先住民の衣裳を着たことで、ティンクの踊りに対してかつて向けられた悪評が乗り越えられた」という旨の主張が聞かれた [C氏 2019年7月4日付]。前述の早魃によって農民や先住民が被った貧困が、都市の人々にある種の偏見を植え付けたことも想像に難くない。

人々の間にある現実的な断絶をよそに、今日ティンクの踊りはボリビア国民の文化的帰属をめぐる感情と分かちがたく直結している。拙論文 [2021:25-26] で示したように、この踊りがチリなどの隣国から模倣されることへの危機感を示す言説はよく聞かれ、2011年7月には同舞踏を「100%ボリビアのもの」と宣言する大きなイベントが催されたほどである [Yamamoto 2021:25-26]。

上述のようなナショナリズムや、現地の人々との交流を伴わない舞踏実践は、「新しい歌」運動が打ち出した国境を越えた民衆の紐帯という理念と齟齬を来たす。この上で、本発表でいう「ティンク」が他ならぬチリ出身の音楽家によってフォルクローレ界にもたらされたとすれば、当初の状況に対して現状がなすアイロニーは大きいものとなる。今後の研究においてこの意味が問われる。

【主要参考文献】

- Sigl, Eveline, 2012, Etnicidad, poder y género. En *No se baila así nomás... Tomo I*, Eveline Sigl, David Mendoza-Salazar, pp.29-337, La Paz.
- Torres, Rodrigo, 1996, Víctor Jara; el artista y su obra. En *Víctor Jara: obra musical completa*, Compilado por Gonzalo Badal, y Carlos Altamirano, pp.25-55, Ocho Libros Editores, Santiago de Chile.
- Yamamoto, Hiro, 2021, Más allá de la folklorización: una reflexión etnográfica en torno a los movimientos reivindicativos del *tinku* en Bolivia. *Iberoamericana* 42(1):19-31.
- LP 盤
- Inti Illimani, 1973, *Canto de pueblos andinos*, EMI.
- Los Taquipayas, 1976, *Los Taquipayas*, Lyra.
- Luis Rico, 1985, *Luis Rico*, Lyra.
- Víctor Jara, 1970, *Canto Libre*, Odeon.

マプーチェのマプとは何だったのか？

工藤由美（国立民族学博物館）

キー・ワード： マプーチェ、環境、マプ、生、互酬性

What was Mapuche's Mapu ?

YUMI KUDO (National Museum of Ethnology)

Keywords: Mapuche, environment, Mapu, life, reciprocity

2021年11月3日、英国グラスゴーで開催された国連気候変動枠組み条約第26回締約国会議（COP26）会場で、地球温暖化対策の国際交渉に先住民との対話の場を設けるよう要請する「ミンガ（集会）」が行われ、先住民側は、世界の多様な生物の70%が先住民の住む地域に集中しており、「先住民が置かれた状況や提案を含めずに、気候変動の解決策を語ることはできない」と主張した。同集会にはチリの先住民であるマプーチェも出席していた。

本報告の目的は、上述のような世界規模で認識されている「環境」に対し、マプーチェが環境、とりわけ「マプ（*mapu*：土地）」についてどのように認識し、どういった実践を積み重ねているかの検討を通して、マプーチェの環境の見方と他の見方との異同を比較した。

地球環境問題において従来、先住民は進歩的な環境開発に対する抵抗ないし主要な障害とみなされてきたが、今では、先住民文化はグローバル化の進展なかで次第に、環境破壊がもたらす問題に対する革新的な応答とみなされるようになってきている[シモン他 2019:141]。先住民にとって土地や自然がその社会と文化統合の重要な基礎であるということの意味を、マプーチェのマプから検討する。

土地が「先住民の文化統合の基礎」[シモン他 2019:147]。となっているとはどういうことか。ここではマプーチェ語の2つの表現から考察した。第1は、日々繰り返し交わされる挨拶である。人と会った際に「あなたは元気ですか」「はい、私は元気です」といった意味の表現がマプーチェ語でも交わされるが、重要なのはこの挨拶表現の中に現れる「あなた」と「私」とはどのよ

うな存在かということである。マプーチェ語の「私は元気である」という表現における「私」は単なる「個」人ではない。もちろんこの「私」には自分が心身ともによい状態であることが含まれるが、他に、私の家族（親族）も健康で、家族内に諍いがなく、また家畜の状態に問題がなく、畑の作物も順調に育っていることなども意味し、さらには、自分たちの共同体内に大きな問題がなく、自分たちの住むマプが総じて落ち着いているということまでも含み込んでいる。それは、常日頃から上記のことに気を配り、何らかの問題があれば、すぐに対処できるような心構えと準備をしておくという、彼ら自身の生き方の一つの現れである。それは、「マプの中に生きているすべての存在＝自分の周りに広がる世界」の中に自分を常に位置づけ、その全体を日々評価しながら生きるということなのである。

第2は、マプーチェ語の「モゲン（*moguen*：生、生命）」という言葉である。彼らは人間、動植物、川、山、家屋など自然界の全てにモゲンがあると捉えている。そして、その生あるものたちには、それぞれ所有者「ゲン（*guen*）」が居り、ゲンの状態もまた、それぞれのモゲンに影響を与える[Citarella 1995:54]。手入れをされないまま廃墟と化したマプーチェの伝統的な家屋ルカ（*ruka*）の事例はその一例である（図1）。翻って、さまざまな生あるものたちを内に抱えるマプのモゲンは、上記個々のモゲンたちが織りなす集合的な出来事として解釈できる。なぜなら、マプーチェの先祖たちが代々語り継いできたマプの歴史とは、マプの記憶であり、同時に彼らマプーチェの直接の「知識（キムン：*kimn*）」でもあるが、それはすべてのゲンとモゲンから成り

立っている〔工藤 2013:167〕からである。

そうしたマプに対する人々の実践を、ここではマプーチェが自己とマプとの関係を再確認する儀礼でもある「ギジャトゥン (*guillatun*)」を例に検討した。ギジャトゥンは天候や収穫など共同体全体の安寧に関わる集合的祈願儀礼である。儀礼では、共同体の人びとがマプに豊穡や安寧を祈願する一方、マプに対しては収穫物を供え、家畜を供養することで共同体とマプの間の互酬関係の存在・継続を確認することになる。人々の祈願と供養の間には均衡が保たれることが重要であるが、それは、マプ自体をよい均衡状態に保つことにもつながるからである。ギジャトゥンでは共同体成員同士の相互贈答を通じて彼らの間の互酬関係も再確認されるが、そこでも贈答の質的量的均衡が重要と認識されている。

マプーチェにとってマプとは何なのか、また、マプとのかかわり方はどうあるべきと考えられ、実践されているのかを整理しておく。

マプーチェにとって、マプ (土地) とは自分たちに先んじて存在し、自分たちの存在の前提となるものである。すべての生はマプに生まれ、マプや他の生たちとの関係の中で成長し、次世代へ生をつなげていく。そして、マプとのかかわり、またマプの中のさまざまな生たちとのかかわりの中で何より重要なのが、互酬関係における均衡である。それぞれの関係における均衡が、その全体としてのマプの良い均衡状態に連動するからである。この均衡への指向を支えているのは、マプとマプに存在するさまざまな他の生 (モゲン) へのリスペクトであるが、それは、マプーチェの日常がこれらを意識した実践で形作られることで、日々更新されていく。マプーチェにとって、そもそもの日常が環境と共生し、折り合う実践だったのである。長らく不在にしていたマプ＝首都圏への移住＝帰還で問題となるのは、マプとの新しい関係の確立を支えてくれる新しい均衡を見出すことだといえよう。

最後に、人間以外の種にかかわる環境実践について簡単に考察する。

環境についての近年の議論の中には、植物の感覚系を理解しようとする試みや、動物の心へ

の感受性を養うというような主張が出現しているが、いずれも非日常を日常に取り込むべきだという主張に見える。しかし、マプーチェの環境実践は彼らの日常そのものであるに過ぎない。日常に非日常を外挿しようとする試みや主張にどれほどの可能性があるのか報告者には疑問が残る。



図1 首都で先住民組織が活動する家屋「ルカ」

【主要参考文献】

工藤由美、2013、『先住民組織からケアを描く：チリの首都におけるマプーチェ組織活動の民族誌』、千葉大学大学院人文社会科学研究所提出博士論文、pp.1-318。

シモン・ジャンヌ・W、ゴンサレス・パラ・クラウディオ、2019、「国家の開発促進と先住民の権利：マプーチェの自決権要求とチリ政府の緊張関係」、『グローバル化する<正義>の人類学：国際社会における法形成とローカリティ』、細谷広美・佐藤義明編、pp.139-166、昭和堂。

Citarella, Luca et al., 1995, *Medicinas y culturas en La Araucania*. Editorial Sudamericana.

植民地時代中期ポトシ銀山とその周辺部社会における市場経済の浸透と先住民

真鍋周三（兵庫県立大学）

キー・ワード：ポトシ銀山、カシケ、水銀アマルガム法、ミタ、水銀汚染

La penetración de la economía del mercado y los indígenas en las minas de plata de Potosí y su contorno en el medio de la época colonial

SHUZO MANABE (University of Hyogo)

Keywords: las minas de plata de Potosí, cacique, amalgamación de azogue, mita, contaminación por mercurio

1. はじめに

1570年代後半から17世紀前半にかけてポトシ銀鉱業は繁栄し、ポトシには巨大市場が出現した。この時期、アルティプラノ（海拔高度3800m前後の高原地帯。その特徴は高地の湖と広い高原で先住民の密集地帯であった）の先住民共同体首長であるカシケ(*cacique*. 別名 *curaca*, *malluku*)は貢納を徴収し、ポトシ銀山の強制労働であるミタ(*mita*)労働者を自己の共同体から選出・徴集する役割を支配者から強いられた。だがカシケは単なる受け身の仲介者だったのではない。商業活動を展開し、農牧畜用地を入手し、自己の経済的地位を向上させようとするアクティブな存在でもあった。

カシケのうち、社会的上昇を遂げていた人々の事例としてシカシカ地方カラマルカ村のペドロ・チパナ、パカヘス地方ヘス・デ・マチャカ村のガブリエル・フェルナンデス・グアラチらについてみると、彼らはポトシ銀山のミタの選出人・差配を務めていた。他方で彼らは、ペルー南部海岸地帯の溪谷部に出向いてぶどう酒を仕入れ、シエラ（山岳部）のポトシをはじめとする諸都市で販売するなど、商業や輸送業に従事することで富を蓄えていた。こうしたカシケの経済活動の実態を検討すると、17世紀において一部のカシケが実に企業家精神に富む人々であったことがわかる。

報告では、カシケが扱った商品としてぶどう酒とコカを大きく取り上げた。ポトシ市場への周辺部地域からの商品提供に注目した場合、この二つは16世紀末から17世紀にかけて最も重要な商品・換金作物であったこと、アルティプラ

ノのカシケがとくに好んで取引した商品だったことがわかる [Glave 2000:163]。

植民地時代前半期から中期にかけてポトシとその周辺部社会において市場経済が浸透するにつれて、17世紀後半になるとポトシ銀鉱業が低迷していく。17世紀という時代が進行していく中で、アンデス社会の変化や先住民の状況をみていく。

報告の流れであるが、まずII章では、ポトシ銀鉱業の基本的事項を扱う。III章では、市場経済の浸透と先住民について検討する。IV章では、17世紀ポトシ銀鉱業におけるミタ労働者の減少とその影響を考察し、最終章で結論を述べる。

2. ポトシ銀鉱業をめぐる基本的事項

本章では、まず、1570年代に第5代ペルー副王トレド(在位1569-1581)によって開始された、スペイン王権によるポトシ銀鉱業への介入、そして出現した官民混合事業への流れをみていく。またポトシ銀鉱業を実質的に支えた生活必需物資の調達について検討する。そしてポトシ周辺部における各拠点地域の出現とカシケについてみていく。

3. 市場経済の浸透と先住民

17世紀になると市場経済の浸透が顕著になった。ぶどう酒とコカの流通を基軸に市場経済浸透の実情をみていく。ポトシ銀山のミタの抑圧が高まるにつれ、先住民の中には元の共同体を離脱し、よそ者(*forasteros*)となって生きる人々が増えるが、その経緯を市場経済の浸透とも絡めて検討する。先住民社会に少なからず変化が

訪れる。

4. 17 世紀ポトシ銀山におけるミタ労働者の減少とその影響

本章では、ミタの抑圧に苦しむ先住民の状況をいちだんと深化して考察する。採鉱部門はもとより、とりわけ精錬部門において先住民は過酷な労働を強いられた。その最大の原因は、1570 年代以降ポトシに出現した銀の精錬方法である水銀アマルガム法と密接に結びついていた。その実情をみると、ポトシにおいて水銀中毒症が蔓延しており、水銀汚染の実態が浮上する。ミタ労働者 (*mitayo*) の激減はポトシ銀鉱業の下落を招く。

5. おわりに

ポトシ銀山の繁栄は水銀アマルガム法による銀の精錬と王権によって再編されたミタを基盤としていた。17 世紀アンデスの先住民社会はポトシ銀山の繁栄・停滞・凋落と平行して変容を遂げていく。カシケがキーポイントを占めた。アルティプラノのティティカカ湖周辺の先住民共同体においてその社会変化は著しかった。カシケがポトシ市場の需要に応えるべく、太平洋沿岸部やラパス・ユンガスにおける商品・換金作物であるぶどう酒やコカの取引にもっぱら従事したことは注目に値する。市場経済が浸透していく中で一部のカシケはまさに富裕者となった。

ぶどう酒生産は太平洋沿岸部のアレキパやモケグア地域の溪谷部に集中していた。コカの栽培はラパス・ユンガスにおいて先スペイン期から行われていたが、それをスペイン人征服者が継承した (アシエンダ・大農園の形成)。その労働力の多くはアルティプラノから供給された。多くの先住民がポトシ銀山のミタを免れたい一心でユンガスに身を投じた。先住民成年男子が共同体を離脱してよそ者となる現象は副王トレドの時代以前からみられたけれども、しかし副王トレドの諸政策以降、この現象に拍車がかかった。ポトシのミタ労働者の生存環境が著しく悪化したためである。ロビンズの研究が示しているように、17 世紀においてポトシの精錬部門

を中心に水銀中毒症が蔓延した。ミタの回避が顕在化した。主たる逃亡先はラパス・ユンガスであった。しかし、共同体を離脱した先住民は、今度はアセンダード (農園主) から強力な支配を受けるようになり、アシエンダに緊縛され不自由な状況下におかれる。他方、17 世紀末になると共同体にとどまったカシケをはじめ先住民はレパルティミエント (コレヒドール・地方行政官による先住民への物品の強制販売) 制の抑圧に晒されるようになった。

16 世紀以降ポトシの銀鉱業は植民地ペルーの経済を牽引してきた。だが 17 世紀末の時点でペルー副王領内を俯瞰すると、ポトシ銀鉱業の衰退と反比例するかの如く経済の多様化がみられる。例えば、ポトシ以外にも多数の銀鉱山が出現していた。キト地域では織物業が伸長していた。リマ、アレキパなど海岸部諸都市を拠点とする農牧畜業・商工業、そして内陸部でも同様の地域経済の進展がみられるようになった。

【主要参考文献】

Choque Canqui, Roberto, 1987, Los caciques aymaras y el comercio en el Alto Perú. En *La participación indígena en los mercados surandinos estrategias y reproducción social siglo XVI a XX*, Olivia Harris, Brooke Larson, Enrique Tandeter comps., pp.357-377, Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social, La Paz.

Glave, Luis Miguel, 2000, Trajines, abastecimiento y mercado: Potosí, siglos XVI-XVII. En *Potosí plata para Europa*, Juan Marchena Fernández comp., pp.155-174, Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, Sevilla.

真鍋周三、2022、「植民地時代 (中期) ポトシ銀山とその周辺部社会における市場経済の浸透と先住民：ぶどう酒、コカ、水銀」、『人文論集』、第 56 巻、pp. 37-73、兵庫県立大学。

Robins, Nicolas A., 2011, *Mercury, Mining, and Empire the Human and Ecological Cost of Colonial Silver Mining in the Andes*, Indiana University Press, Bloomington and Indianapolis.

アンデスの物流を支えたアリエーロの活動と社会的・宗教的意味づけ

上原なつき（名桜大学）

キー・ワード： 山岳信仰、他界、コスモロジー、周縁的人物、経済的均衡

Actividades comerciales de Arriero en los Andes y sus significados sociales y religiosos

NATSUKI UEHARA (Meio University)

Keywords: culto a las montañas, el otro mundo, cosmología, persona marginal, equilibrio económico

1. はじめに

アプリマック県アンタバンバでは、「死者の日」やクリスマスの祭りにおいて、重要な役どころとしてアリエーロ（arriero）が登場する。アリエーロとは、馬やラバなどの荷役獣を用いて物品運搬や交易を行う人物のことである。道路が整備されトラックやバスによる物流が確立した現在、アンタバンバではアリエーロを生業とする人はほぼいなくなった。

アンタバンバのアリエーロに関する先行研究が管見では今のところ見つけられていないため、本発表では、まず、その他地域のアリエーロに関する先行研究をまとめることで、アリエーロの交易活動の経済的側面を概観した。次に、アンタバンバの祭りにおいて、なぜアリエーロが重要な役どころとして登場するのか、その社会的・宗教的役割をアヤクーチョ県のアリエーロと山に関する説話から考察した。

2. スペインのアリエーロ

アリエーロの習俗は植民地期にスペインからアンデスにもたらされたと考えられるが、スペインにおけるアリエーロの起源は不明である。エストレマドゥーラ県ではかつて、毎年農閑期に農牧民が2～6か月間程度、アリエーロとして働いた(Calero y Carmona 2011, p. 157)。他国では物珍しい品とされた当該地の焼き物や、保冷効果のある土器のボトルを販売した。マドリッド、パリ、ストックホルム、ベルリン、コンスタンティノーブル、ラトビア、ベネツィアなどまでアリエーロは旅をし、交易を行った。遠方のほうがより高値で売れ、電気冷蔵庫が普及する頃まで交易は続いたという [Calero y Carmona 2011:156-

165]。

つまり、アリエーロとは運搬業や単なる馬引きではなく、交易人的要素が強い職業であることが理解できる。

3. コノ・スール地域のアリエーロ

次に、南米のコノ・スール地域のアリエーロについて見ていく。当該地のアリエーロはアンデス山脈を越えて、大西洋と太平洋を結ぶ物流網・交易網を支える重要な役割を果たした。蒸気船が当該地域の物流を担うようになる19世紀末までのおよそ300年間、アリエーロが物流と交易の要であった。

また、ブエノスアイレスからクスコまでという広い範囲で活動したため運搬料も高く、パンパで育てた家畜を各地で販売・賃貸するなど、当該地域のアリエーロは高い収益を上げていた [Lacoste 2008:35-36]。

4. アンタバンバのアリエーロ

主な交易ルートはチャルワンカ、アバンカイ、クスコ、キリヤバンバ、セルバのユンカ地方、プキオ、ナスカ、パルパ、イカ、オコニャ谷、マヘス（アレキープ）などである。数か月かけて旅の準備がなされ、女性たちが商品としてリクリャやボンチョなどの布製品を織った。アンタバンバでは、アリエーロは少なくとも1960年代頃まで存在したという [Aranibar Chaccara 2008]。

5. 死者の靈魂を導くアリエーロ

アンタバンバで11月1日から2日の「死者の日」に行われる死者儀礼アニメーロ（Animero）では、生前にアリエーロだった人物の頭蓋骨が

使用される。アリエーロの頭蓋骨は帰郷する死者の靈魂を道案内し、また、死者が生者をあの世に道連れにすることを防ぐという。なぜなら、死者の家があるとされるコロプナ山の近くを、アリエーロは交易の旅で行き来するからである。つまり、アリエーロはあの世への旅路を知る人物である [上原 2018]。

6. アヤクーチョ県のアリエーロに関する説話

次に、アヤクーチョ県のアリエーロに関する3つの説話を紹介した。説話①「アプ・ワマニとアリエーロ」では、山の神アプ・ワマニとアリエーロの関係性が語られる。アプ・ワマニはアリエーロが勤勉で山への礼儀を怠らない場合は庇護し、自らの所有物である金銀などの富を与える。しかし、礼儀を欠き、利己的態度を取れば人間を動物の姿に変え、死をもたらす [García Miranda 2010:4]。

説話②「アリエーロである雹」では、雹はアリエーロであると語られる。野生動物は雹の荷役獣である。雹が雷鳴を轟かせて畑を叩くと、あらゆる農作物があらわれる。雹にとっては人間もラバであり、時に人間を殺し、魂とその荷物も奪った [García Miranda 2010:5]。

次に、説話③「アリエーロを庇護する死者」についてである。煉獄にある死者の靈魂もアリエーロを庇護する存在である。アリエーロは時に墓地で夜を過ごすことがある。そこで強盗や家畜泥棒にあったとしても、死者の靈魂がアリエーロを庇護し助けてくれる。しかし、墓地の死者の靈魂が庇護するのはよそ者であるアリエーロや旅人だけである。地元の者たちが墓地で寝泊まりすれば、死をもって罰せられる [García Miranda 2010:8-9]。

7. まとめ

アリエーロは運搬業や単なる馬引きではなく、交易人である。コノ・スール地域のアリエーロは高い収益を上げ、地方の経済発展に寄与した。しかし、アンタバンバのような山間地の小さな農村では、アリエーロは農民の副業的職業であり、そこまでの収益はなかったであろう。しかし、村

で生産された布製品などの交易により、村では生産できない様々な物品を村に持ち帰ったことから、村の人々の生活を支える重要な役割を担った。

加藤 [1991, 1998] によれば、都市からやってきて村に住む仲買人や白人の農場主はピシュタコと呼ばれ恐れられた。ピシュタコは有益なもの(村人の脂肪)を奪って都市へ売り払い、富を独占する。ピシュタコは村内の経済的均衡を乱す、村の内外を行き来する周縁的人物として危険視された。一方、アリエーロも同様に村の内外を行き来するが、アリエーロの場合は村外から村へ富をもたらす有益な人物として、アンタバンバの祭りでは重要な役どころとして登場する。

また、アヤクーチョの説話では、アリエーロの庇護者である山や雹はアリエーロに富も与えるが、時にその命と積み荷を奪う。人間と山の間の経済的均衡を調整するために、アリエーロの命と積み荷を奪うことで、人間による極端な富の独占を禁止する。つまり、加藤のピシュタコに関する研究では村内の経済的均衡が問題となったが、アリエーロと山の関係では、人間と山の間で経済的均衡を保つ必要性が示されている。

【主要参考文献】

García Mirada, Juan José, 2010, *Arrieros y acémilas en la literatura popular andina, Pacarina del Sur*, 2:1-16.

加藤隆浩、1991、「ピシュタコ:アンデス世界における村落と都市の媒介者」、『伝統宗教と知識』、杉本編、pp.121-148、南山大学人類学研究所。

加藤隆浩、1998、「アンデス高地農民の民間信仰：ピシュタコの社会的意味」、『文化人類学の展開：南アメリカのフィールドから』、大貫良夫・木村秀雄編、pp.119-136、北樹出版。

Lacoste, Pablo, 2008, “El Arriero y el Transporte Terrestre en el Cono Sur (Mendoza, 1780-1800)”, *Revista de Indias*, LXVIII(244):35-68.

上原なつき、2018、「死者儀礼アニメーロの変容と継続：儀礼の再興と中止からフォルクローレ・フェスティバルの演目化まで」、『アンデス・アマゾン研究』1:73-89。

ボリビア・ラレカハの農地改革（1）

木村秀雄（自由学園最高学部）

キー・ワード： アンデス東斜面、アシエンダ、先住民共同体、自営農園

La reforma agraria en Larecaja, Bolivia（1）

HIDEO KIMURA (Jiyuakuen College)

Keywords: Eastern Slope of the Andes, Hacienda, Comunidad Campesina, Propiedad Particular

1. 分析の枠組

分析の理論的枠組は、『アマゾンアンデス研究』第一号 [木村 2018] および *Senri Ethnological Studies* 111 [Kimura 2022] の論文と同様である。すなわち、「個人の行動とそれが生み出すものは多様であり予測は不可能である」、「多様な行為が生み出したものがパターンを形成する」、「パターンが制度（体系・構造）を作りだす」、「制度が個人の行動を拘束する」、「制度の拘束を逃れる個別の行為が生じる」というもの。

時間を辿る変化を記した文書も用いるが、実際の調査は一つの時期に成立する多様な現実を対象とせざるをえないために、これまで調査した地域の詳細なデータをもとにして論ずる。

今回の発表は地域と経営単位を分類したのち、その統計的分析を行う。個別の経営単位の詳細な分析は次回以降に予定している。

2. 対象地域

ボリビア、ラパス県（Departamento de La Paz）ラレカハ郡（Provincia Larecaja）セクシオン・ソラタ、キアバヤ（Sección Sorata y Quiabaya）。サンクリストバル川（Río San Cristobal）、チラバヤ川（Río Chilabaya）および両川が合流したリカ川（Río Llica）流域の溪谷地帯。

3. ラレカハの歴史

[先スペイン期]

スペイン植民地期の巡察記録によれば [Diez de San Miguel 1964] チチカカ湖岸の政治集団から派遣された人々の居住地が散在していた地域であった。これが、ジョン・ムラが唱えた「垂直統御」のうちで「列島型」と分類されるものである。征服前から現代に至るまで、高地部から亜熱

帯低地への通路・重要な交易路であった。

[植民地期]

アルティプラノの政治集団の支配を逃れてラレカハの先住民村落は自立し [Saigne 1985]、植民地期末期の先住民反乱では Tupac Catari の本拠地の一つで Republiqueta de Larecaja（ラレカハ小共和国）と呼ばれた。

[共和国期]

1952 年のボリビア革命においてアルティプラノの Achacachi を中心とする農民運動が波及した地域であり、Wila Saco と呼ばれた Paulino Quispe による大臣殺害事件が起こった場所であり、近年は Malluk と呼ばれた Felipe Quispe に率いられた先住民運動が盛んな地域であった [Muruchi Poma et.al 2008]。また、石油公社民営化の反対運動の一環としての 溪谷の封鎖事件も起こった。

4. 使用資料

[資料]

Instituto Nacional de Reforma Agraria INRA 所蔵資料 (Expedientes)

[地理的範囲]

Provincia Larecaja 分類されているもののうち作成時に 3 つのカントン名 (Sorata、Ilabaya、Quiabaya) と記されたものを抜き出した (資料の作成時に Millipaya は Sorata に、Tintilaya は Quiabaya に属していた)。

[経営体の分類]

アシエンダ (Propiedad Particular con Colono) 自営農園 (Propiedad Particular sin Colono) 先住民共同体 (Comunidad Indígena) の 3 種類に分類。

5. 農業生産による地域区分

「ジャガイモ栽培専業」商品生産＝高標高部の旧大アシエンダ、自給生産＝高標高部の旧アシエンダ

「トウモロコシ栽培専業」低標高部の旧アシエンダ、低標高部の小規模自営農園

「両作物栽培」チラバヤ川左岸の先住民共同体および中央尾根の先住民共同体の、標高による栽培作物の偏り

6. 統計上の比較（1）所有形態別比較

「平均総面積」「可耕地平均面積」「非耕地平均面積」は、アシエンダ [186.0426 ha、44.4600 ha、141,5765 ha]、先住民共同体 [42.0890 ha、26.6503 ha、15.4387 ha]、自営農園 [5.5833 ha、2.6444 ha、2,9439 ha] となり、アシエンダの数値が最も大きく、次が先住民共同体で、もっとも少ないのが自営農園となった。これは3つの経営体の性格から予想できる結果である。しかし、「総面積に占める可耕地の割合」は、アシエンダが 23.90%、先住民共同体が 63.32%、自営農園が 42.25%となり、先住民共同体の数値が最も高く、アシエンダが最も低くなった。これは農地改革原簿に含まれている先住民共同体が低標高部に偏っていたため、調査地域の先住民共同体の典型的姿を示しているわけではないことを考慮に入れておく必要がある。

7. 統計上の比較（2）カントン別比較

先住民共同体はカントン・イラバヤにしかないので除外し、アシエンダと先住民共同体について、イラバヤ、ソラタ、キアバヤの3つのカントンを比較した。比較する項目は、（1）と同じく「平均総面積」「可耕地平均面積」「非耕地平均面積」「総面積に占める可耕地の割合」の4項目である。

「アシエンダ」

イラバヤ [168.6919 ha、37.9894 ha、130.7025 ha、22.52%]、ソラタ [172.5417 ha、44.2353 ha、128.3063 ha、25.64%]、キアバヤ [228.2993 ha、50.8309 ha、177.4684 ha、22.27%] である。キアバヤの数値が最も大きく、イラバヤの数値が最も小さいが、有意の差はない。特に、総面積に占める可耕地の割合には差がない。

「自営農園」

イラバヤ [2.7452 ha、1.7945 ha、0.9507 ha、65.37%]、ソラタ [5.4275 ha、2.4344 ha、2.9931 ha、38.05%]、キアバヤ [8.8033 ha、4.1742 ha、4.6291 ha、47.42%] である。アシエンダと同じく、「総面積に占める可耕地の割合」を除くと、イラバヤの数値が最も少なく、キアバヤのものが最も大きくなっている。

8. 可耕地比較

可耕地について、「アセンダド」「コロノ」「自営農民」「共同体先住民」に分類して、「一人あたりの占有地平均面積」と「土地区画ごとの平均面積」を比較した。

アセンダド [10.3937 ha、1.0951 ha]、コロノ [1.4263 ha、0.3024 ha]、自営農民 [1.9001 ha、0.9305 ha]、共同体先住民 [0.2891 ha、0.1815 ha] となった。

アセンダドの数値が高いのは当然としても、コロノや自営農民との差は小さく、またコロノと自営農民の間の差が予想より少ない。共同体先住民は数値が低い、資料の不十分な性格から確定的なことを言うことができない。

【主要参考文献】

- Diez de San Miguel, Garcí, 1964, *Visita hecha a la Provincia de Chucuito*, Casa de la Cultura, Lima.
- 木村秀雄、2018、「農地改革期クスコ農村社会の多様性と制度」、『アンデス・アマゾン研究』、1:1-54.
- Kimura, Hideo, 2022, *Diversidad y estructura de las sociedades rurales cusqueñas en la época de la Reforma Agraria de Velasco Alvarado, y sus condicionantes ecológicos, históricos e institucionales*, Yuriko Yagi (ed.) *Etnografía Andina: Recorrido y Valoración Cultural*, *Senri Ethnological Studies III*, National Museum of Ethnology, pp.81-123.
- Poma, Muruchi, Feliciano F. Muruchi P., María A. Morales H., Ernesto I. Herrera L., 2008, *Ponchos Rojos*, La Paz: FODEMPO, Plural.
- Saigne, Thierry, 1985, *Los Andes orientales: historia de un olvido*, Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social, Cochabamba.

アンデス・アマゾン学会ホームページ
URL : <https://sanams.web.fc2.com>

アンデス・アマゾン学会事務局
〒905-8585 沖縄県名護市為又 1220-1
名桜大学 国際学群 長尾研究室気付
事務局連絡先 : anam.estudios@gmail.com

アンデス・アマゾン学会研究発表要旨集 11 号
Proceedings of the Annual Conference of SAAS
Volume 11

発 行 日 : 2022 年 11 月 20 日
編集・発行 : アンデス・アマゾン学会
発 行 者 : 会長 大平秀一
編集代表者 : 石丸香苗